

# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——(二十六)

津 守 真

### 五歳児の製作

5月26日

子どもが自分から作り出すものには、形はとどのつていなくとも、何か子どもの成長にとって意味深いものがあるように思える。五歳児の年長組になったYの家庭での作品のひとつを次に示してみよう。

Yは私に「箱とって」と言う。(空箱は台所の高い棚の下に重ねてある)私はYと一緒に箱の棚の下に見にゆき、Yが「これ」というのをとってやる。Yは「さいころつくろうかな」と言う。私は「さいころもいいし、他のものもつくれるね」という。Yは「とけいにしようかな、どっちにしようかな」と言って箱を見ている。真四角のかなり大きな箱であったが、Yは白い画用紙を出してきて、セロテープで六面に貼り、角を折ってきちんとする。「あたしは数字ができないから、さいころにしたの」と言う。こうして作りはじめると、切ったり貼ったりして、黙ってひと

りで長時間作っている。

「できた。あとはいさころ」と言つて、一つの面に丸を四つかく。次の面には大きな丸を一つかき、図(五六ページ参照)のように、丸の中に鳥をかくて、「おりこう」と私にかかせる。次の面には丸を七個かく。次の面には丸を三つかくが、図のように、それぞれの丸の中に、家、鳥、同心円が描かれる。次の面には渦巻きをかき、「ぐるぐるパー」と私にかかせる。次の面は、いくつか曲線をぬりつぶし「くろこげ」と私に書かせる。

「はい できた、さいころですよ——」と言つて、かかえて歩いている。

そのさいころは、しばらく後、部屋の中に放り出してあつた。姉たちの友だちが遊びに来て、そのさいころを、「これなあに」と言つてすぐに興味をもち、遊びはじめる。「ぐるぐるパーが出た」「りこうが出た」と言つて、ころがしてさわいでいる。

この後、何日間も、このさいころは、子どもたちころがされ、人気があつた。

## さいころ

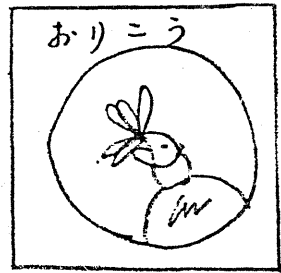
Yは「さいころつくろうかな」と言う。「あたしは数字ができないからさいころにしたの」と言う。このさいころは、すぐろくなどの駒を進めるのに用いるさいころでないことは明らかである。それでは、五歳のYにとってのさいころとは何だろうか。

箱の六面に白い画用紙を苦心して貼ると、「できた。あとはいさころ」と言つて、各側面に、図のように描き、その中の三面に、「おりこう」「ぐるぐるパー」「くろこげ」と命名する。このさいころをころがすと、数ではなくて、異なつた図柄が出る。一つの平面に異なつた図柄を並列して描くのではなくて、立方体の異なつた側面に異なつた図柄を描くのであるから、一つの物体が異質な側面を持つことに関心を抱いていると言えらるだろう。その立方体を投げると、そのたびに異なつた図柄が出る。

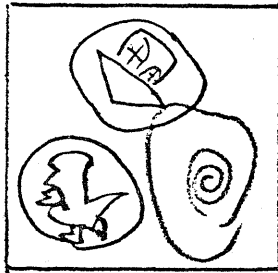
「おりこうと命名されたものは、丸の内側に動物が描かれたものである。Yにとつては、枠の内側におさまつてはみ出ない状態が「おりこう」なのであろう。実際、この子どもは、常識の枠に自分自身をはめておとなしくしていることがしばしばある。

「ぐるぐるパー」と命名されたものは、内側から外側に向う渦巻である。これは丸の中にはめられていない。ぐるぐると回つてば

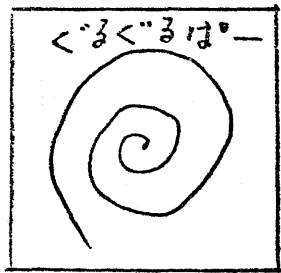
(1)



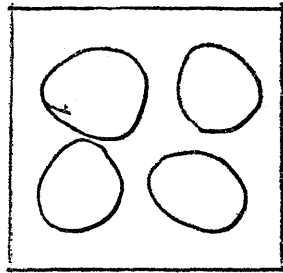
(4)



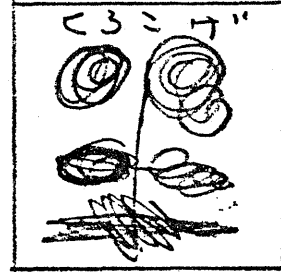
(2)



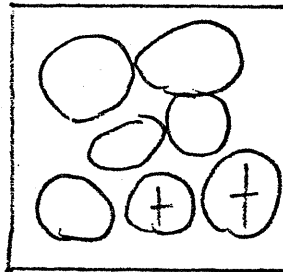
(5)



(3)



(6)



ーと外に向って開放される動きである。Yの成長の過程には、外に向って大胆に足を踏み出してゆく時が何度も見られる。「ぐるぐるばー」というのは、世に言う頭がおかしいということではなくて、ことばの音が示す通り、ぐるぐる回転してばーと開放される動きと言ってよいと思う。

「くるこげ」というのは、黒く強く塗りつぶした図柄である。くるこげは火と関係がある。火にかけすぎて過熱するとくるこげができる。Yは小さいときからクッキーやケーキを焼くのが好きで、くるこげは日常の体験である。そこには、しまった、しくじったという感情体験もふくまれている。また、ふだんは外に表わさないが、ときに激しい情熱を噴出させることがある。それもく

るこげの体験と關係があるかもしれない。

第四面は三つの円形から成るが、そのうち二つは丸の内側にそれぞれ、家と鳥とが描かれたもので、「おりこう」が二つあると言えよう。あとの一つは同心円の渦巻で、「ぐるぐるばー」に相当する。両方が合わさって三個の円を形作っている。

第五面は四個の円である。四は東西南北、四本柱の四、四角の四隅に示されるように、安定した数形である。

第六面は七個の円より成るが、これは恐らく沢山の円のことであり、豊かさを示すものであろう。

こうしてつぶざに見ると、このさいころの各面の図柄は、簡単なようであるけれども、異なった心の動きを反映していることがわかる。

Yはさいころの各面を描き終ると、「はい できた、さいころですよー」と言っておかえて歩いていった。しばらく後、部屋の中に放り出されていたそのさいころは、子どもたちに人気があった。子どもたちはすぐにこれを見つけ、「これなあに」と言ってお手にかかえて、投げてころがし、「ぐるぐるばーが出た」「りこうが出た」などと喜んで大きわぎした。このさいころは、子どもた

ちの共感を得たのである。すぐろくの進度をきめるさいころとしてはなく、ただ投げてころがして、異なった図柄の面が出るのをたのしんだ。それはこの図柄が伝える心の動きが子どもたちの共感と呼んだと言えるのではないかと思う。

このYのさいころには、私も長い間心を魅かれていたが、いまあらためてこれを考え直してみても、その魅力の一端が分ったような気がする。私共自身、社会から期待された枠の内側で「おりこう」にしている時もあるし、また、ある時には、ぐるぐる回転して向う見ずに外にとび出してゆく時もある。また、過熱し、「くるこげ」になって後悔する時もある。それは、一人の人間、一つの出来事の異なった側面である。子どもは子どもなりに、おとなはおとななりに、事柄は違うけれども、人間として共通の体験があるように思われる。このさいころを、両腕にかかえて歩いていった幼児の姿に、このような人間の原体験が蔵されていたことを思うとき、頭の下がるような愛しさを覚えるのである。



(つづく)